

火星



平成15年6月号

四大抄

山尾玉藻

風つめたくて出口らし苗木市

春の夜の太閤殿の前とほる

アイロンに余熱桜の満開に

亀鳴くと言ひたるに顔日の照つて

ゴールデンウイークどくだみの花に雨

藤房に眼鏡似合つてをらざりし

水無月の流木に子の跨つて

川風のかよひ始めの蛇の衣

しづかなる溝浚への横通りけり

花氷の横ではぐれてしまひけり

火星作品

山尾玉藻選

冬 滝のとぢこめてゐる水のこゑ
大和郡山 城 孝子

飴色の父の帽子や春蚊出づ
躑にに向けて餌を撒くさくらの芽
のどけしや買うてすぐ履く布の靴
春の灯の東京駅にカレー食ぶ

藤井寺 戸田春月

中天に滑車とどまる養花天
桶叩く音の短くあたたかし
アドバルーン下ろす綱あり日永なり
ふらここの力抜くとき耳朶のあり
車より下ろす日永のベビーカー
添水のおとやたらと高き朧かな
薄氷や熊笹を鳥翔ちしなり
積み上げし薪の片減り鳥交る

箕面 浜口高子

金盃の蝌蚪覗き込む一クラス
芽吹山よりちろちろと闇魔滝
残る鶴けもの声を出しにけり
春灯の吹き荒れて門司下関
若布刈舟石の百段ありにけり
回転ドア遠足の子のふたりづつ
日の差して目白いつぱい集まる木
ちよつと寄りけり三月の流れ橋
鳥帰るズボンの裾のすり切れて
春風に自転車倒れやすきかな
アネモネに気ままを通すひと日なり
湖の真中の荒れに鶏乳む
春の夜の点滴の音夢寐にあり
亡夫の画に見下ろされぬて朝寝なる
辞書古びたり永き日の我もまた
似たような道へ又出て日の永き
暮れ遅し木を切る音の絶えてより

宝塚 杉浦典子

八幡 吉田島江

芦屋 柳生千枝子

選のあとに

山尾 玉藻

蹠に向けて餌を撒くさくらの芽 城 孝子

渡り鳥の鴨や白鳥等を餌付けしている景である。「蹠」に写生がある。蹠に向けて餌を撒くのは玄人の仕草、素人は頭の上から餌をやりかねない。「さくらの芽」はモンタージュであるが、作者には湖の端に咲いた桜が想像されたのであるう。

桶叩く音の短くあたたかし 戸田 春月

「音の短く」と捉えた所が眼目。この素直な感覚が読者の共感を呼ぶ。テーマは瑣末だが勘所は充分に捉えている。

金盞の蝌蚪覗き込む一クラス 浜口 高子
回転ドア遠足の子のふたりづつ 杉浦 典子

高子さんの句は送られてきた「蝌蚪」を「金盞」に移しているのか、又は皆でそれぞれに採つて来た「蝌蚪」を「金盞」の一つにしているのか、兎に角いま「蝌蚪」が「金盞」に入つたのである。幼稚園児か小学低学年位の子が一齐に覗き込んだのであるが、「一クラス」が良い。典子さんの句の「遠足の子」

は幼稚園児の服装の方がよく似合う。この句も下五の「ふたりづつ」で一句を成している。両句共、幼子の様子を可憐に捉えていて快い。

アネモネや日暮れに使ふ化粧筆 木野本加寿江

「日暮れに使ふ化粧筆」は端的で軽妙洒脱な表現である。勿論宵の口から外出するための化粧である。ここでの「アネモネ」は茎の振れを思わない方がよい。可愛らしい明るさがこの句に合うのである。

実直な一輛電車梨咲けり 元田 千重

この句、春月さんの「桶叩く音の短くあたたかし」の句の作り方に気息的呼吸的に似ている。感覚が素直に詠み込まれている。「実直」が良い。言われてみれば大いに納得できる。

芹摘みの籠に鱗付いてをり 戸栗 末廣

この「籠」は決して魚籠ではない。普通の円筒形の籠であろうが、籠の目は細かいだろう。「芹摘み」の前は魚が入れた事があるのであろう。決して漁村ではなく、農村の生活がそこはかと窺われる。

かたづけしあとの春愁深くせり 野澤 あき

この句、「春愁」の説明のようであるが、そうではない。作者はむしろ「春愁」を打ち払おうと「かたづけ」をしたのだ。整理整頓はされたものの、その後の行動が思い付かなかつたのだろう。益々「春愁」を深くする事となつた。

こまごまと鶏冠の動く桃の下 大石 芳三

「鶏冠」と「桃の花」は同じ系統に入る赤紅色とは言え、その違いは大きい。「桃の花」は明るいが落ち着いた透明感がある。それに比べて「鶏冠」はやや暗く、やはり肉感的である。「桃の花」の下を「こまごまと」動く「鶏冠」は絵になる。ちよつとした俳諧のある句である。

雪間草 小声の二人ふと笑ふ 波田美智子

「ふと笑ふ」の笑い様は、声に出さない明るい笑いが良い。まだ雪の残る笑い様なのである。季語「雪間草」の本意は草よりもむしろ雪間にあるようだ。佳品である。

黒文字の花の盛りの出開帳 丸山 照子

「黒文字」の花は淡い黄色で地味である。花の盛りと言え派手さはなく、むしろ寂しい。いかにも「出開帳」が行われるような鄙びた山寺の様子が見えて来る。

花冷や庭師の使ふピンセット 西畑 敦子

近頃病んだ木を治療する人を樹医と言うらしいが、この「庭師」が樹医であるかどうかは解らない。ただ、この句の中の季語「花冷」即ち桜との関わりは無いと見た方が良い。「花冷」の候の「庭師」のちよつとした所作を感じ取れば良いのである。

喪の使ひ春のシヨールを外しけり 小林あつ子

作品の中で「喪の使ひ」と言う措辞は、近親の喪では使わないように思える。それ故、黒づくめではないのであろう。「喪の使ひ」の仕草による美しさが女性の美しさを増長させる。「春シヨール」故にである。同時作の「雛壇の重箱に飴入れてあり」も、ちよつとした発見を捉えている。

波稜草 指おゆでそろへて絞りけり 金澤 明子

「指そろへて」は「波稜草」が少人数分故の仕草である。繊細な指が見えて来る。俳句はこの辺でも充分なのである。

猫の手に肉球のあり春の泥 長屋 璃子

作者は泥の付いた猫の足裏を拭いたのだろう。高い所からの落下に耐える為か、猫の足裏は犬等とは違った膨らみ様をしている。作者はそれを「肉球」と言ったのである。言われてみれば納得出来る。それを句にしてしまうのが俳句である。

差知子俳句鑑賞

十葉がもつとも雨を愉しめる 差知子

(『岡本差知子句集』より 昭和五十一年作)

「十葉」は俗に言う「どくだみ」。独特の臭気を持つ白い十字の花である。先生は少々嫌われもののこの植物にも俳人の眼をそそがれた。黄色の穂状のものが花の集まり。雨に打たれても元気な子供のような十葉を、愛情をこめて眺め面白がっていられる。

(千枝子)

玉藻俳句鑑賞

ゆつくりと人殖えてゐる菖蒲園 玉藻

(「火星」平成十四年七月号より)

あやめ科には菖蒲、杜若、花菖蒲、あやめ等種類は多いが、剣のような葉の間から紫、青、白、黄と美しい花を楚々と咲かせる。王朝絵巻を思わせるその中に人は自ずと雅びな気分浸っていくのである。「ゆつくりと人殖えて」に菖蒲園の有り様が語られ、読み手もゆつくりと引き込まれていく。

(高子)

恒星圈

田中英子

めいめいに動いて蝌蚪の昼動く
競りを待つ木材市場春の雪
ものを食ふためのエプロン春愁
がうがうと父が眠れる木の芽雨
風花す信貴山頂の幼稚園

城 孝子

田中吞舟

昼過ぎて氷柱の丈のそろひたり
狐火は湖の上かみなる露天風呂
鶴交み終へたる歩幅なりしなり
鳥雲に環状線の内と外
船頭のあたまの上を春の月

十七の妻をめとりし遠き春
病院の味噌汁今朝も蒔蓀草
初蝶の双つたくみな宙返り
坐禅草春の息吹を甲山
大声で君が代歌ふ卒業日

杉浦典子

戸田春月

待ちをれば水取寒の月真上
お水取り了りし雨となりにけり
小鳥の巣ざわわざわと風吹ける
木の芽風虎が爪とぐ丸太あり
紅梅の丘より雨の上がりたる

一斗入の陶樽ならぶ長閑さよ
花のころ杜氏人形の硝子の眸
うららかや猪口の底なる二重丸
鳥かへるころや手擦れの狐桶
春水の泡の中にひそむもの

獅子座

山尾玉藻推薦

高松由利子

河崎尚子

大久保廣子

春鹿の力ある目に見られをり
蕨越す修二会の竹のうすみどり
如月の大湯屋昼を灯しあり
水取りや飯粒沈む寺の溝

堀義志郎

吉田康子

春愁や鱻食う前と食うた後
地の果ての岬に至る蝮草
花大根舟と錨の捨てありぬ
お彼岸の日の出の一部始終かな

戸栗末廣

大東由美子

土筆野の焦げ土の濃きひとところ
花冷の廻り出したる洗濯機
鯉提げてバスに揺らるる日永かな
妻も句をかんがへてゐる雛の日

朝東風や紫衣の下なる白きもの
手に曳きし房の五色に御開帳
内股にぬぎある下駄の遅日かな
鳥雲になに動きあるわすれ潮

春の田に舞ひ落つ羽根の白きかな
気がつけば腰撫でてをり犬ふぐり
花あんず目を逸らしたるとき紅し
げんげ田をいつばい使ふ竹とんぼ

二月堂風花舞うてをりしかな
飛石をぬらせる程の春の雪
朝粥にかき餅入るるさくらの芽
お水取の明りが届く転害門

横たはる幹を伝ひし春の雨
靴底に土噛んでゐる桜かな
青空に雲一つ行く薔薇芽かな
風船に空の高さを聞きにけり